雲鷹丸　第7次実習航海報告

摘　要

本航目的は、明治44年度第3年生をして漁撈、航海、運用の実習をなさしむると同時に、台湾南部、香港、菲律賓(フィリピン)方面の水産に関する研究、海洋及生物の調査をなし、流潮試験瓶流、生物採収等による学術研究上の資料を得んとするに在りしを以て、発航前に於て我外務省より英・米両国大使館に所要交渉をなし、且つ台湾総督府に対して右(上)目的上便宜を与へられん事を照会したり。而して3月初めを以て発航し、6月下旬鹿児島を経て帰港すべき予定なりき。其各寄港地に於ける調査事項は次の如し。

寄港地	調査事項
基　隆	鰹漁業、土人の鰮漁業其他各種漁業、台湾に於ける漁業状態、漁具、漁船、漁獲物
馬　公(マカオ)	鱶(ふか)釣漁業、底魚漁業、其他漁業の一般
打　狗(高雄)	鱶流網漁業、底魚漁業、其他漁業の一般、捕鯨
香　港	各種漁業及漁業の状態、制度、習慣、魚市場、漁船、漁具並びに天蚕糸に関して南京床の種類、産地、製法、価格等
マニラ	各種漁業及漁業の状態、制度、習慣、マニラ麻の原料、種類、品質、製法及価格、其他麻等に就て標本を採収すること、動植物標本採収

準備概要

明治44年11月より品川碇泊及月嶋河岸繋泊中に於て、諸帆索具等の修繕、水槽内部の塗換、船室、汽罐等の掃除、機関修理等を整へ、

45年2月17日　午前6時、満潮に乗じて石川嶋船渠に入渠し、船底掃除塗換並に推進器検査を了し、

2月18日　午後4時50分出渠し、

2月19日　未明曳船を以て品川港に移転投錨し、石炭(残量10屯、新規購入20屯)、飲料水、汽罐用水(合計60屯)、糧食、漁艇、漁具等を搭載し、

2月26日　黒田技師、鎌田技手、川上助手並に左(下)記の生徒20名乗組を終り、発航準備整へたり。

記

戸井田二郎	大場　哲夫	国分　友海	野崎　知之	照井　賢三
山本　三策	霜村　平七	神山　捨吉	小塚　銀八	清　藤太郎
石井　文吉	葛城　忠男	水野　均治	島田　喜一	八木三千彦
飯田与兵衛	丹羽　六一	松尾政二郎	平瀬　博	庄司　勇

［明治45年第15回卒業生］

航　海　日　誌

明治45年3月2日　午前10時、道家水産局長、下本所長等来船せられ、所長より左(下)の訓示を与へられたり。

訓　示

諸子は本期漁撈実習の為め本日を以て遠航の途に上らんとす。今茲に諸子の行を祝福すると共に、一言述ぶる所あらんとす。今回の航海は台湾南部に於て漁業を実習する外、香港、フィリピン等の海面に於ける海洋及生物の研究並に漁業状況を視察し、学術研究上の資料を得んとするに在り。指導教官の指示に従ひ、平素習得したる学科目を実習に応用する事を期すべし。

規律を厳守し、生徒たるの本分を尽すべきは諸子の常に服膺(ふくよう)するところなれば、改めて謂ふを要せざるも、英領又は米領にも寄航すべきを以て、特に前回露領寄航の場合に於ける訓示事項を再読して、諸子の注意を新にせんとす。

1. 写真を撮影し、又は写生するを得ず。(要塞其他禁止の場所)
2. 船長の許可なくして郵便又は電報を発することを得ず。
3. 外国領海内に於て釣其他の遊漁を為すことを得ず。(許可を得たる場合を除く)
4. 船長の許可なくして物品を買入るることを得ず。
5. 上陸中猥(みだ)りに教官指導以外の場所に行くことを得ず。
6. 挙動言語を慎み、嫌疑を招き感情を害することなき様注意すべし。

若しそれ衛生に注意し、健康を保つべきは言を俟たずと雖も、南洋熱帯圏に出入する諸子に対して特に自重自愛を切望するところなり。

所長の訓示終りて、局長より亦懇篤なる送別訓誨を与へられたり。午後1時総帆を展開して抜錨し、館山に向ふ。同時、局長以下来賓退船せられたり。午後2時風力減退したるを以て諸帆を納め汽走し、午後5時47分館山港に到着し、両錨を投じて碇泊す。

3月3日　生徒及水夫漁夫一同を指揮して、館山倉庫より所要漁具を搭載す。午後3時寄宿舎に於て生徒の体格検査を行ふ。(其詳細は事務長提出表に在り)

3月4日　午前5時55分抜錨汽走、門司に向ふ。8時濛雨強風となり、波浪漸く増す。午後0時37分下田港に避難寄港す。(他船の同港に避難せるもの3隻)

3月5日　風雨稍鎮まりたるを以て、午前7時20分抜錨進航し、午前8時30分石室岬(石廊崎)を経過し、11時54分御前岬(御前崎)を過ぎ、午後6時半神島灯台を経過し、夜熊野沖を航行す。

3月6日　午前6時25分潮岬灯台を航過し、正午日ノ岬(日ノ御埼)に並ぶ。午後3時20分、[illegible]島海峡に入り、5時半明石海峡に入る。是より降雨濃かにして、暗黒数尺を弁し難きに至りしを以て、徐行淡路島の北側を探り適度の水深を求めて、午後6時54分右舷錨を

投じて仮泊す。

3月7日　午前0時55分降雨稍薄らぎたるを以て、抜錨進航し、5時13分小豆島の南端を過ぎ、8時大槌島を過ぎ、9時25分多度津港の沖に至り、再び天候不順なるを以て投錨仮泊す。

3月8日　午前8時抜錨進航し、11時15分百貫島を過ぎ、午後2時長瀬戸西口を脱し、午後8時屋島に並び、11時媛島を過ぐ。

3月9日　午前3時26分門司海峡東口に至り、検疫の為め部岬灯台沖に仮泊して天明を待つ。午前8時検疫を終りて直ちに抜錨し、9時23分門司港に入港す。本日石炭50屯、罐水12屯搭載し、生徒は任意上陸見学なさしむ。

3月11日　練習生新井藤一郎(12回卒)、黒野元憲(14回卒)乗船す。午後3時20分、抜錨出帆し、5時30分大文字灯台を過ぎ、正午烏帽子島灯台を南/東1海里に見て過ぐ。

3月12日　午前0時55分加唐島を経過し、1時16分一汽船と相航過す。是より針路を南70度西に定め、五島の北方を指し、一等運転士に船橋当直を命じて休憩中、突然怒号並びに機関通信器の音響を聞きたるを以て、蹶起(けつき)船橋に至り見しに、本船船首は一小帆船と接触したる侭、機関停止しありしを以て、直ちに機関逆転を命じ、前進惰力全く止むに至りて、之を停止し被害船員4名は直ちに本船船首より引き上げ、同時に3艇を下して、其被害船救助に赴かしめたり。其間に於て当時当直の本船一等運転士及見張番並に遭難船舵取に就きて取り調べたるに、該帆船が当初無灯航行し来り、漸々相近づきて既に距離余裕なきまで切迫するや、狼狽して緑灯又は白灯を出入して意志不通ならしめ、其操舵も亦猥りに転々としたる為め、本船をして之を避くるの様なからしめたるに基因するものと認められたり。而して同船の諸要項は左(下)の如し。

名　　称	福　壽　丸
船　　籍	山口県長門国阿武郡東合村
種類及トン数	帆船　17トン
積荷種類	炭の空俵　1千俵
所 有 者	田邊権次郎
乗 組 員	4名　船長 田邊藤一、妻 アキ、 水夫 山本亀吉・吉村彦一
損害の程度	右舷上棚及中棚板5枚破折、肋骨1本折損、錨及積荷流失
衝突の位置	馬渡島南々西約2.5海里

午前3時55分遭難船に曳綱を付着し終りたるを以て汽走徐航し、7時45分佐賀県東松浦郡名古屋(名護屋)錨地に寄港投錨して被害船を呼子町海岸に送り、且つ本件詳細を同地警察署に報告せり。

3月13日　午前6時50分出港し、午後0時43分古志貴島(甑島)灯台を過ぎ、2時57分適風を得帆走に変じて基隆に向ふ。夜に入って順風漸く強し。

3月14日　午前2時16分、海流瓶1号～48号を投ず。其位置 32°25'N　127°30'E。
午前9時17分、第二予定位置に至り、第2回分即ち49号～69号を投ず。其位置 32°N 127°E。　正午70号～90号を投ず。其位置 31°33'30"N　126°41'E

是より連日雄烈なる北偏風浪に送られ、曇天にして屢々濃雨あり。一回の天測をも得ざる事数日に渡りしも、日々予定以上の航程を得たり。

3月17日　午前2時、南方遥かに澎佳嶼の灯台を認め、9時同島を経過して汽走に変じ、午後1時39分基隆に着し、第4浮標に繋留す。

3月18日　事務打合せの為め、小官は黒田技師と台北に出張し、鎌田技手は生徒6名と基隆付近漁業調査に着手す。

3月19日　鎌田技手は生徒を指導して漁業調査に赴き、小官は黒田技師と台北より帰船す。

3月20日　鎌田技手は生徒を率いて社察島漁業調査に赴き、黒田技師、川上助手は台北庁技手同行し、真珠に関する調査に赴きたり。其詳細は川上助手の報告書に在り。

3月22日　午後、石炭7屯を補充搭載す。

3月23日　総督府殖産局は特に安達技手を派遣して、本船の行動に関する案内者として乗船せしむ。正午抜錨、澎湖島に向ひて進航し、午後4時30分海流瓶91号～142号を投入す。其位置　25°30'N　121°30'E。是より総帆を展装して帆走、目的地に向ふ。

3月24日　午後10時10分　澎湖島媽宮港に投錨す。

3月25日より毎日、安達総督府技手及下山澎湖島水産課員の案内により、黒田・鎌田両教官指導の下に生徒一同漁業調査に従事したり。

3月28日　午後5時50分、漁業調査に関する予定行動を了りたるを以て、直ちに出港、打狗(現高雄)に向ふ。航途左(下)の3点に於て海洋調査を行ひたり。其詳細は川上助手提出の図に在り。

1. 23°19'N　119°42'30"E　2. 23°08'30"N　119°50'E　3. 22°56'20"N 120°00'E

3月29日　午前8時20分打狗外港に到着し、右舷錨を投じて港務部の指揮を待つ。8時30分港務部員来船し、水路嚮導をなし、抜錨内港に進入し、8時40分B浮標に繋留す。

本日より直ちに安達技手案内教官指導の下に生徒一同は打狗付近及東港の漁業調査、仔頭台湾製糖会社の見学に従事し、川上助手は打狗付近に於ける鰕(えび)の養殖に関する調査を行ふ。

4月1日　打狗に於ける予定行動を終はり、午前7時4分抜錨、汽走大板轆に向ひ、午後1時38分到着投錨す。此日、川上助手は鹿港総督府養蛎試験出張員詰所に出張して、養殖業調査に従事す。

4月2日以後、毎日捕鯨艇を出して捕鯨を試みたるも、時季稍後れたるにや、鯨は同湾に近寄らず、遂に獲る所なく、又夜間飛魚流網漁を試みたるも、恰も月夜の頃なりしを以て好成績を得るに至らざりき。其間に於て黒田技師は生徒2名を率ひて熱帯植物試育場に赴き、繊維植物(麻類)に就き調査を遂げたり。

4月6日　午後零時50分抜錨、打狗に向ふ。午後6時20分小琉球島の南側に至り、停止して漁艇2隻を派出し、鱶流網漁を実習せしめ、其間本船は海洋調査を行ひたり(川上助手報告書に詳なり)其位置 22°16'30"N　120°22'E。午後8時45分漁艇帰船す。所獲無し。同時前進す。

4月7日　午前零時29分打狗港外に着し投錨し、午前10時17分港務部の指定を受けて内港に進入し、同54分D浮標に繋留す。

4月8日　用炭41屯、清水13屯を補充搭載す。此日、川上助手帰船す。

4月9日　安達技手退船す。午前11時50分浮標を放ちて進航し、午後2時基本羅盤の誤差検定を行ひ、2時50分検査を終りて総帆を開展し、帆走香港に向ふ。

4月11日　午前9時40分大星簪岩(Pedsoblanko Rock)の南方約2海里半に至り、縮帆して、1浬半の速力に減じ、ビームトロール漁実習を行ふ。正午 115°5'E 22°20'N に至りて、ビームトロールを引き上げしに、ヒラ、グチ、タチウオ、ハモ、エビ類5種等の収穫あり。同時再び投網して午後4時55分引き上げしに、殆ど前回同様の収穫あり。思ふに実験を積み、良漁場を発見するに於ては、該界隈は同漁方に好望たるを得べきか。支那人漁船は無数群をなして縦横に航送漁せるを見たり。午後5時再び帆を増して針路を復し、夜9時20分大鵬湾沖合に至りて汽走に変じ、正子香港港口に入る。

4月12日　午前零時38分香港港界線外 Chung Kwang Bay に投錨す。午前7時港吏来船し、便宜内港適当の地に入港すべき旨を告ぐ。同時抜錨進航。午前8時28分香港港内ワンチャイ湾ケレット島の北西側に両錨泊をなす。同日、帝国領事館及香港港務部等に出頭、来意を報じ調査見学上の便宜を託す。

香　港　概　況

香港島は大陸と相対して一長海峡を擁し、其中央部に市及び港を有せり。全島の景稍佳なるも、概ね荒廃不毛の岩質山脈より成れり。其最高嶺を Victoria Peak と称す。島の西北部に位し、高潮面を抜く事1,809呎(554m)に達す。山上には気象台、信号台、病院、兵営、貯水池、大旅館及別荘、住宅等在り。登山鉄道ありて、昇降に便せり。島形北西より南東に長くして約9海里に及び、北東、南西は2海里乃至5海里とす。周囲には延長22哩に亘る軍用道路あり。全岸出入多くして、数多の港湾を形成せり。大龍湾、大潭湾、チェックッイ湾、チンスイ湾、チャンアム湾等、皆良好なる錨泊地たり。而して大陸と本島間の海峡に在りては、独り鯉魚門(りえむん)峡の水深稍大に過ぎて、錨泊に適せざるを除けば、到る所好錨地たらざる無し。其最良なるものを香港港となす。香港港は香港島と大陸の間に在り、西口は広東及澳門(マカオの旧称)に通じ、Stonecutter Island の西端より Green Island の西端に引きたる一線を以て港界となす。新嘉坡(シンガポール)、サイゴン方面の船舶は多く、是より出入するを常とす。東口は大東水道により北方及東方よりする船舶の通門たり。九龍桟橋の西端よりノースポイントに引きたる一線を以て港界とす。地理及海底の利多きが上に、東洋貿易上枢要の位置を占め、且つ自由制度を施せるを以て船舶の出入頻繁なる実に東洋の最と称せり。其海事に関する諸機関の整備亦倣ふべきもの多し。即ち天文台は既に久しく東洋各地の気象調査報告に関して先進者たる信用を博しつつ、日々詳細なる予報を分ち、暴風に就ては特設信号法を以て刻々其侵来方向距離を詳報し、以て船舶避難に遺憾なからしむるを計りつつあり。時辰儀、観測器具等、船舶の要求に応じて矯正をなし、且つ日曜

日を除くの他は、日々正確なる時報を以て、各船時辰儀比較を便せしめつつあり。港務部は艦船の舶泊地と通路を制定し、整然乱れざるを得。航路標識の設備、上陸又は碇泊禁制区域等も亦一見了解し易からしめあり。出入届類手数最も簡明にして、此の繁雑ある事なし。若し修繕入渠等工事を要するものあるに至りては、海軍省専属のもの以外、ホンガム湾の九龍船渠あり。渡の対岸にコスモポリタン船渠あり。香港島西岸にアバーデン船渠あり。海峡内クァーリー湾にタイクー船渠あり。皆最新式大規模のものにして、大船巨船の加工に耐ゆ。其貨物呑吐の設備、用炭水の供給、糧食品購求の便、海員病院、海員合宿所、船員倶楽部等の類、一の遺憾なきは一班に称揚せらるる所たり。然し乍ら検疫寛にして、放縦なるやの感なき能はず。此地に出入したる船舶は稍もすれば疫癘(えきれい)(疫病の意)を伝ふるあるは大に鑑み戒むるべき事なるが如し。

人口は約40万と称せられ(我同胞約1,300人)出入船舶屯数は約3千万屯以上と唱えり。

工業は造船、セメント製造、製紙、製糖、製綱、煉瓦、鉄器、鋳造、釜鍋製造、硝子製造、朱製造、阿片焙造等を重とす。

気候は信風によりて二つに大別せられ、夏季は即ち西南信風(季節風)期にして暑熱季たり。冬季は北東信風(季節風)によりて冷涼季たり。7,8の両月は最熱期にして、気温(華氏)73度(23℃)乃至100度(38℃)の間を昇降し、昼夜の差約10度とす。香港市は島の北側にして、島寄によりて夏季南西信風を遮ぎらるるが故に最も苦熱を覚ゆる事多く、只島の南岸は該信風(季節風)洋上より来りて大に緩和するが故に山上の住居は爽快を覚ゆと謂へり。11月至2月は最冷期にして、気温華氏平均40度(4℃)に下る。嘗って此期間に於てヴィクトリア峯上に結氷を見しと云ふも、甚だ稀な出来事とせり。而して此期間は屡温度の急変を起す時にして、偶々南偏の風を伴ふて殆ど熱帯的烈熱の日あれば、次に凛烈氷刀の東北風となり、天曇りて気温急下する事あり。其最も強烈なる偏北東風は両3日連吹するを常とす。3,4月の両月は雨霧多く、湿気多し。5月より8月までは雨季と称せられ、降雨殆ど絶えず。

以上僅かに概要を挙げたるに過ぎず。本港に出入する船舶責任者は年刊チャイナシー・ノーチカルマニュアル、支那水路誌第1巻総記、第2巻第1編1ページ至83ページを熟読して、水路危険物、禁制区、特定信号、水先案内並に疾病注意等に関して熟知するを要す。其所要海図は帝国水路部版第420号、421号、英版419号A,B、2212号、423号、351号、320号、295号等とす。

本船碇泊中、黒田技師、鎌田助手は通訳者を雇入れ、学生を指導して魚市場、漁村等に就て調査を遂げたる結果により、更に澳門方面の漁業視察の必要を認むるに至りしを以て、当時電信上申したるが如く、4月18日　黒田技師、川上助手の2名は澳門に出張し、一泊して該方面の漁業調査を行ひ、4月19日　帰船したり。

船員は損所修理、鉄部防腐手入等に従事したり。19日船用品を購入し、汽罐水10屯を補充搭載したり。

4月21日　米国領事館よりマニラ航行に関する健康診断を受け、其証明書を受領したり。

4月23日　午後2時香港を発し、無風なりしを以て汽走す。

4月24日　午前8時帆走に変じ、マニラに向ふ。時に強風なきにあらざりしも、概して軟風にして、暑気燃ゆるが如く、昼夜の差僅かに数度に過ず。船員一同之れに苦しみたり。

4月26日　臨時水夫梅田高吉、胃腸病に罹り、漸次不良の状態となりしが、岩崎事務員加療の功あり、5月2日全快す。

5月1日　夜呂宋(ルソン)島の西方距岸約50浬に於て、烏賊釣を試み、暫時にして数十尾を獲たり。然し其体重に比し釣具小なりし為落下するもの多かりし為め其群を逸したり。

5月3日　午前7時30分マニラ湾口の北側検疫地ポートマリベルスに寄港して、掛員の臨検を受け、10時40分抜錨進航を続け、午後2時55分マニラ築港内第5埠頭沖の浮標に繋留す。

マニラ概況

マニラ湾は梨子形をなし、湾入約30浬、其奥部の幅も亦約30浬あり。湾口は幅約10浬にして、中央部にコーリッシドル及カバロの２島ありて、南北2通の水道に分てり。其水深湾口水道にありては14～15尋にして、湾内は漸次相減じ、大船は湾内到所に投錨し得べく、打瀬網漁者の従業地帯亦甚しく広し。現に我漁夫130名あり、30隻の打瀬漁船を以て好成績を挙げつつあり。而して湾口両岸の陸は高くして樹木鬱蒼たるを見るも、湾頭の浜岸は低くして沼沢及鹹湖あり。河流数条湾内に注ぐが故に、海水稍混濁を帯ぶるは就漁者の便とする所なり。

湾内有名の地はマニラ、カヴイテ及湾口のマリベルスとす。左(下)に各個概況を略記せし。

Kavite Harbour

カヴイテ港はマニラの一港にして、マニラ市の南西約7浬に在り、海軍工廠あり。現に東洋に於ける米国海軍鎮守府所在地にて Subic Bay に移さるべき計画あるも、同湾の Olongapo は大工事に困難ありと謂へり。市街は半島低地に建ち、墻壁(しょうへき)(障壁の意)を繞らせり。而して此半島の北端 Sangley point は年々35呎東方に拡延して北方半浬に引きたる無標線を港界とし、其内部を海軍錨地とせり。米国海軍所属外の船舶は在泊先任海軍将校の許可なくして此線内に入るを得ざるの制あり。又該区域内には灰燼塵芥其他廃棄物を投ずるを得ず。是等を掃除せんとするものは、万国信号旗Ｌを掲ぐる時は塵船を与へらるべし。其陸上諸設備の重(主)なるものを記せば、無線電信所、普通電信局、石炭貯蔵所、時報信号場、船渠、引揚船台等とす。

マニラ港及市

マニラ市はマニラ湾口より約東北東に25浬の奥に在り、Pasig 河口に位す。古来呂宋(ルソン)島の首府にして、現今米国政庁所在地たり。其主要街衢(がいく)には電車電灯等の便あり。又二人乗馬車は一班(一般)に使用せられつつあり。Pasig 河は市の中央を貫き、北部は Binordo

と称し、殷盛(いんせい)なる商業地たり。而して Pasig 河は河口の南北両端より西方に拡延せる2埠頭に依って界限せられ、低潮18呎(5.5m)の船はスペイン橋下まで溯入するに適し、税関付近の河岸に千数百屯の船舶を繋留するに足る。之を内港とす。而して本河は小汽船の便により遥に10浬上流の内地と交通をなせり。其幅平均350呎(107m)、水深3呎(0.9m)乃至25呎(7.6m)にして、雨季の候は落潮流強きも尚通航の便更に大なり謂へり。

大船は外港防波堤内に泊すべし。防波堤は河口南側の防岸埠頭端より南々西に1浬1/4あり。之を西堤防とし、此所に一条の通航路深さ30呎(9.1m)を存して、更に第二の堤防あり。之を南西堤防とす。南38度、東に延びる事5鍵(間？)にして、5尋海に達せり。港内海岸に三大長機橋あり。喫水30呎の大船を繋ぎ、万屯の貨物を納むべき倉庫を備へたり。本港に入らんとするものは、必ずポートマリベルの検疫を経るを要し、又内港に入らんとするものは強制水先を要す。

輸入品の大なるものは米、麦粉酒、木綿、鉄器、石油、石炭にして、輸出品は麻、烟草、砂糖、コブラの類とす。而して重(主)なる商業は、支那人の手に営まると謂へり。現に支那人はマニラ及付近に5万以上あり、本邦人は僅かに1,200～1,300名にして、三井物産支店、日本バザー、杉浦商店、其他二三の商店を除けば、殆ど商人なく、大工、漁夫等を重(主)とし、散髪職、醜業婦(淫売婦に同じ意)等の雑業者のみなるは遺憾を覚ゆる所なりき。然し乍ら三井、三菱等は支店又は代理店を置いて徐々着手しつつあり。日本郵船、大阪商船及東洋汽船は定期毎に其船舶を寄港せしめつつあり。日章旗を掲げたる社外貨物船三四隻は常に同港に泊するを見たり。其貿易及運送の二つに於ても我は有益の位置に在るを知るに足るものあり。左(下)に前2年の全島輸出入表を挙げて高覧に供す。

単位：価格(1000$)、百分比(%)

輸入	1910年		1911年	
国名	価格	百分比	価格	百分比
合衆国	10,798	29.1	19,819	39.8
仏領東印度	5,455	14.8	7,416	14.9
英国	5,657	15.3	6,290	12.6
オーストラリア	2,302	6.2	2,720	5.5
日本	2,242	6.0	2,475	4.9
独逸(ドイツ)	1,978	5.3	2,360	4.8
支那(中国)	2,701	7.3	2,171	4.4
スペイン	1,387	3.7	1,409	2.9
仏国(フランス)	1,032	2.8	1,214	2.4
英領東印度	971	2.6	1,094	2.2
香港	506	1.4	721	1.4
スウィチランド	543	1.5	532	1.1
ベルジァーム	378	1.0	363	0.7
和蘭領東印度	372	1.0	258	0.5
其他各国	745	2.0	992	2.0
計	37,068	100.0	49,834	100.0

輸出	1910年		1911年	
国名	価格	百分比	価格	百分比
合衆国	18,794	47.3	16,814	42.3
仏国	6,484	16.3	6,686	16.9
英国	5,844	14.7	7,548	19.0
スペイン	1,973	5.0	2,179	5.5
香港	1,458	3.7	875	2.2
独逸	891	2.2	647	1.6
英領東印度	875	2.2	1,058	2.7
支那	801	2.0	671	1.7
オーストラリア	469	1.2	480	1.2
ベルジァーム	407	1.0	991	2.5
日本	323	0.8	372	0.9
其他各国	1,399	3.5	1,459	3.7
計	39,718	100.0	39,779	100.0

此2表に除けたるものは、1910年に於ては陸海軍及フィリピン政庁の輸入したるものと、金銀通貨にして、1911年に於ては金銀通貨とす(前年度まで軍人官吏用の衣食品は官船に

よりて輸入の免税せられたるも、当年より廃されたりと云ふ)。1911年に於て旅客携帯したるもの19,128弗、郵便によりて輸出したる49,232弗、郵便による輸入107,074弗、官船による軍需品輸入2,175,780弗は表より省かれ、又輸入したる外国品の再び転輸送したるものは両年の表に除かれたりと云ふ。

前表によれば、我日本の対菲律賓貿易は一昨年に於て1,918,537弗、昨年に於ては2,102,148弗、輸出超過を得たるを見る。

然し我が輸入率は0.81より0.93に進むに反して、輸出率は6.0より4.9に退減するあり。其詳細を挙げれば、石炭は輸出を増したる最高品にして、マッチ、セメント、絹布、硝子類、薬品、紙、大工道具、陶磁器を稍増加し、其他は増減なく、馬鈴薯、葱等野菜類は漸々減じ、電気、学芸用具等は著しく減退せり。

次に昨年度に於ける貿易額と運漕を比較せば左(下)の表の如し。

国　名	輸出入総額	百分比
合衆国	36,633	41
英　国	13,838	15
仏　国	7,899	9
仏領東印度	7,426	8
支　那	2,841	3
スペイン	3,588	4
オーストラリア	3,201	4
独　逸	3,007	3
日　本	2,847	3
英領東印度	2,152	3
香　港	1,595	2
其他諸国	4,585	5
計	89,612	100

国　名	運漕総額	百分比
英国船	58,392	65
スペイン船	7,384	8
独逸船	7,159	8
合衆国船	5,868	7
日本船	4,494	5
ノルウェー船	2,335	3
仏国船	661	
其他船	1,057	1
菲律賓船	2,261	3
計	89,612	100

右(上)2表を対照せば、英国、独逸、スペイン及我国は貿易額の約3倍半の運漕(運送)をなし、ノルウェーは自国の貿易殆ど無くして我国に次ぐの輸送をなし、其他の諸国は多く他国船に運賃を払ひつつあるを見る。但し対フィリピンの状況に過ぎざるも畧ぼ一班を窺ふに足るものあり。

外国航通の便は完全なり。東洋に航路を有する諸大会社船は概ね寄港せざるはなし。前記我三大汽船も亦其内にあり。而して群島内諸港間に使用せらるるもの小汽船約100隻、帆船20余隻あり、カンパニヤ・マリケム会社を其最大なるものとす。

電信は呂宋島内要地と連絡し、水底電線は群島中パネー(Panay)、ネグロ(Negros)、レーテ(Leyte)、ミンダナオ(Mindanao)、スール等の各大島と連絡し、香港線及びガム(Guam)線によりて世界各地と連絡せり。

季候は1年を3季に分ち得べし。第一を暑季とす。3月より5月に至る即ち北東信風(季節風)の末期にして、在マニラ各官庁の暑中休暇期なり。第二期を湿潤季とす。6月より11月中旬に至る即ち南西信風(季節風)期にして、降雨多く諸河氾濫して殆ど内地旅行を途絶

せしむるに至る事あり。屡暴風雨来りて数日連続す。土人之をコラスと称せり。又当季間の最も忌むべきは沼沢湿地より瘴気(熱病を起こす毒気)発騰して空気不潔となるが故に、熱病患者を生ずる事多きに在り。第三を寒冷季とす。11月末より3月始めに至る北東信風の盛期にして、菲律賓東岸に雨あり。西岸一帯は乾燥せる冷気を覚ゆる時たり。而して本船在泊は第一暑熱期たりしが故に、日夜の別なく炎熱強く、本次航海中最も苦しみを感じたる所とす。

港務局は天文台の報告に基づき、同局信号機及其北西方1/4浬距に於て錨泊船に対し、特定信号を以て暴風を予報し、気象局は砲台崖壁上の杆を以て時報球を以て緑威平時の16時を表示し、船舶時辰儀比較に便にせり。

食糧は如何なる需要も充さるべしと雖も、凡て甚だ高価なり。野菜は我国より輸入するもの多く、肉類は豪州より来り、米はラングン、サイゴンより入り、麦粉は米国及豪州より来り、本島産の糧食品は殆ど無く、只鶏卵、果実類のみ本島産に掛るも、之を他に比すれば共に高価に過ぐるを知る。

本船のマニラに泊する間の行動は、在留邦人漁業者に就て情況を調査したる事、繊維植物並に製綱に関する調査、日菲人合同のトロール会社に関する視察等を重(主)として、一般見学をなさしめ、更にサン・トーマス大学の博物館、天文気象台及び米政府の学術研究局に就て見学をなさしめたる等にして、調査に関しては黒田技師、鎌田技手提出報告書に詳なるを以て本報告には只見学中の大要を記せんとす。

(1) サン・トーマス大学

Intramuros(パシグ河口の西岸に在り、城壁を以て囲繞し、外濠を有する一区域にして邦言城内の意)のパレス町に在りてサント・ドミンゴ寺院と相対せり。約300年前の建築にして、東洋最高の大学と称せられ、我高等学校に比すべき程度なるが如し。医科及宗教を重(主)としたるも、最近改革して他科を加へたりと聞く。其校内に学術参考用として収攬したる標本甚だ多く、現今は堂々たる博物館となり、毎日曜日午前9時より11時まで、一般公衆の観覧に供し、殆ど各種のものを網羅せり。其の最も美なるは禽鳥昆虫類にして、最も珍しきはタマラオ(前世代の動物)の完全なる骨骼、人類及動物の畸形体、__類等にして、最も見るに見らざるは土人の手工品とす。我邦のものとしては、完備せる甲冑刀剣類と豊公時代渡来したる宣教師が歯を抜かれ、爪を剥がれて__倒せるを抱き起して、水を飲ましめ、更に強問(拷問)を続けんとするの惨状を描きたる油絵等に過ぎず。聞く所によれば、豊公は呂宋助左衛門の帰朝によりて菲島の情報を得るや、直に使を送りて我国の属邦たるべきを勧告し、若し従はざれば大軍を以て征討せんと脅迫し、彼の総督は本国政府に伺ふ期間の猶予を請ふて遁辞を設け、以て一時を凌ぎたる事あり。当時の書状今尚大学に保存せりと云へり。米人ハミルトン・エムライト氏は、ヒリピンの概略を記したる著書の一節に於て、菲律賓人は斯かる図画及教説によりて指教せられ、先天的に日本人を恐れ悪み、悪魔視しつつあり云々と説けり。想ふにスペイン人の我邦を恐れたる事実もあるべく、

7-10 (30)

徳川政府の鎖国政策は此国の如き場合もありし事亦事実なるべきか。然し菲人の先天的邦人を忌むの事実如何に至りて頗る疑問たり。

本校長は V.Rev.Florencio Ilanos氏にして、副長は V.Rev.Rafael Ynerra氏なり。

(2) 天文台は Ermita区のアール・フォーラ町に在り、東西200m、南北400mの広大な敷地を有し、長160m、幅80mの建築にして、約半部は生徒の教養に使用せり。50余年前スペイン人アール・フランシスコ、オーラの創設に掛り、其死後現台長アール・エフ・ジョウス・アルゲー氏の下に20余名の教授ありて、200余名の生徒を教授しつつあり。其地震計は我東京天文台のものに比して稍劣るが如きも、其他の諸器は凡て大規模の精良品にして、恒星時辰儀、太陽時辰儀、南中測器、磁力測器、風力風位自記器、気圧計等完全せざるなく、其図書室は天文気象に関する欧米各国の書籍を網羅せりと云ふ。其天文鏡の如きはレンズの径18吋(45.7cm)あり。電気応用自働式にして、遠隔写真器、光線度器等付属し、我天文台所有のものに勝る数等のものと見えたり。本器により得たる月面及ニプラス星雲の写真を示されたるに精緻極みて感賞の価ありき。案内をなしたるスペイン人フランシスコ・コメラス氏にして、流暢の英語を以て懇切なる説明をなし、且器具取扱方法等実行を示されたり。本台は香港、上海及び東京と連絡し、平穏の日は一回の通信を発するに過ぎざるも、気象変現の日、数回送電する事あり。以て各地の気象台を警戒し、本邦の如きは襲来暴風の多くは菲島方面に発するもの多きが故に、本台の通信より多大の便を得る所ありと云ふ。

(3) 学術研究局(Bureau of Science)も亦エルミタ区に在り、哲学博士医学博士パォール・レー・ フリーア氏を主宰とし、各科専門の学者数十名ありて、各種の研究に従事せり。其細菌学者等はペスト菌、コレラ菌の培養試験を行ひ、顕微鏡にて一見せしめられ、其運動する様を見て寒心し、食物菌の各種食品に生殖せる状を説き、動物科に入っては昆虫鳥獣の標本に就て説明し、植物科は無数の草根木皮枝葉を陳列して、熱心に説かれたり。温室あり、氷室あり、鉱物試験場地理科等あり。水産科は未だ多く見るに足るものなきも、アルビン・シェール氏を主任として、数名の学者は専心研究中なるを見たり。図書室は頗る大なるものにして、学術的著述は洋の東西となく収集せり。本邦よりも医会及農会等より寄贈せるもの夥しきを見たり。索具の張力、セメントの硬度も試験しつつありき。想ふに此種の機関としては東洋唯一のものたらんか。是に付属せる博物館は市の北部ビノルド(パッシグ河の北側なる商業殷盛の区域)に在り。菲律賓群島の産物は悉く陳列して、公衆の観覧に供せり。内に於て賞嘆の価あるは良材の類にして、径10吋(25.4cm)余のローアンの円卓数台を始めとし、紫檀、黒檀、黒柿等、幅5～6呎(1.5～1.8m)のもの無数陳列せるは他に見ざる異観たり。ヒリピン山林局(Forestry Bureau)の概算する所によれば、全群島2/3は森林を以て掩はれ、其価格米金200億弗にして、商業上に利用せられつつあるものは天然の災害によりて失ふものの1/100に当らざるを記せり。以て菲島山林の如何を推すべきなり。金鉱、炭鉱等は未だ微々たるが如きも将来に望ありと謂へり。

マニラ官憲の好意

本船のマニラ港外に近付くや税関官吏は小蒸気船にて来訪し、水路を嚮導して第五官有埠頭沖の浮標を与へ、且つ一切の便宜を与ふべきを陳べたり。小官等は在留副領事杉浦恒造氏の案内によりて、税関長を往訪したるに、頗る丁重に応対をなし、本船滞留間は可能的便宜は一切与ふべきを陳べたり。而して上陸に関しては、或は Bureau of Navigation に命じて、小蒸気を送り、或は官有埠頭の使用を自由ならしむる等の便を与へたり。

海陸測量局(U.S. Coast & Geodetic Servey)の局長フィリップ・エーウェルカー氏を往訪したる時は、海陸測量の経路に就て懇話し、且つ本船所要の菲島海図13枚及水路誌5冊を寄贈せられたり。

学術研究局長は自ら全局内を案内して、各部員に充分なる説明をなさしむる等、総て懇篤を極め、生徒見学上多大の便を与へられたり。其談話中、同局は本船の彼の国に於けるは、アルバトロス号の日本帝国に於けると同様視すべきものたるが故に、全島を随意に巡航し、調査をなさん事を望み、若し巡航せば水産技師シエール氏をして案内せしめん云々と語り、本船が今航時日余裕なきを答へたるに対しては、次回其機あらん事を望む旨を語り居り、而して同局各部受持員等は皆丁重好意を表し、同局発刊の報告書一部を川上助手に贈り、以后毎年我講習所報告書と交換贈答をなさん事を相約したり。

水産技師シエール氏は水産部の主任にして、目下頻りに標本採集、水族館新設並に孵化研究等を務め居る人にして、数回群島各方面を巡回したる結果を語り、菲島間には魚族豊富なれども、土人就業者少く、且つ甚だ幼稚なる方法によるが為め未だ良成績なきも、前途大に開発の望あるが故に、日本人の渡来して斯途の展開に従事するもの多からん事を望む云々の談話をなし、且つ氏の調査を了したる真珠、海綿、海鼠(なまこ)等の産地図面を示し、本船の一回巡航あらん事を望み居たり。而して氏はその水産物に関する著書2冊を贈致したり。

在留帝国副領事杉浦恒造氏は斡旋を務めたり。本船滞泊中、彼の諸官署がよく好意を表し、便宜を与へしもの、或は杉浦氏尽力の切多きによるものあらんと思はれたり。

5月9日　午後6時マニラを発し、ミンドロ島のガレラ港に向ふ。但し此地はマニラ湾口を去る約50海里南方に在り、学術研究所は此所に水族採集所並に発動艇を供へ、局員を派出しあり。大学教授の水産に関する者数名も亦相集まりて水族の研究に従事しあり。且つ魚類豊富の地なれば漁業実習にも亦可ならんとの勧めによれり。而して研究局水産部主任シエール氏は其妻女と共に便船を乞ひたるを以て之を諾したり。午後8時30分マニラ湾口付近に至りて微速力となし、シエール氏と計りてビームトロールを試用する事2回なりしも、1回は網纏絡の為め漁獲なく、1回は時恰も順潮流に会したると、海底の下り坂の形体なりしとによるか、又は珊瑚礁脈散在せしに帰するか、僅かに少数の蝦族数種と碌魚の小なるもの数尾を獲たるに過ぎず。

5月10日　午前0時10分トロールを引き上げて全速力航進し、午前8時36分ガレラ港に入港

す。本港はミンドロ島の北西岸に在り、四周悉く繁茂せる山林に囲繞せられたる良錨地にして、軟風南東より来りて、常に清涼爽快を覚ゆ。陸上には二三土人の小屋と米人のテント生活をなせる者即ち学者達の仮小屋と仮事業場を有するに過ぎず。対岸の一村には約20戸の土人小屋あり。港内には時々大小の魚族活躍するを見、又所々に土人布設の魚筌浮標あるを見たり。土人は手釣と筌と小なる引網を用ゆるの他、漁具を有せざるも彼等所要を充して余りありと云へり。本船は1艇を出し、帆走引網を試みたるも獲る所なく、夜に入りて港外数浬に2艇を出し、流網漁を実習したるも又獲る所なかりき。

陸上には所々土人の薯畑とココア樹林の散点せるを除けば、鬱蒼たる千古の樹林を以て掩はれ、界隈に唯一の鰐魚出没を見るの外毒蛇猛獣の類なく、鳥族、蝙蝠、野豚、野禽の類のみ棲息せりと云へり。其樹木は悉く堅材にして、紫檀族のもの最も多く、土人は稀に之を製材として貿易する事あるも、未だ鋸、斧の利用至らず。又は交通未だ開けずして、良材も価格殆ど云ふに足らず。且つ食して遊び以て天命を楽める彼等は、強て労働の要なきを以て、汀岸より山上まで未だ人跡なき森林ならざるはなし。由来菲律賓群島の民族は西人(スペイン人)、土人、支那人及雑種に大別せられ、土人中には開化族、半開族及野蕃族に大別せられ、其言語、風俗等より細別せば数十種の多きに達す。而してモロ族、イゴロス族及一部ネグレトス族は我生蕃人(文明に同化しない未開地の人々の意)と異ならず、最近南部に於て邦人所有の珊瑚船乗組員は全くモロ人に殲殺せられたりと云ふ。其棲息地方によりて之を分つ時は、海岸の者(海賊を除くモロ種)は多少教化あり。深山に在るものは獰猛なる首猟の蕃族たりと云ふ。而して本港所在のミンドロ島はマンゲェーアン種と称し、半開族中に含まるるも、本港付近の土民は温良順僕(純朴)の風あるは気候温和にして衣住の道立ち易く、土地肥え魚類多くして食を得るに容易なるを以て、食して遊び以て天命を楽むに至れるものならんか。本船滞泊中、或は刻舟(バシカと称せり。南洋諸島のカイなり)を以て渡海を助け、又は釣漁同伴をなす等無償を以て快く好意を表するもの多かりき。

5月11日　夜土人の言に従ひ、港内に流網を試したる。鯖科の一種にて約1尺のもの300有余を獲たり。

5月12日　午前7時抜錨基隆に向ひ、8時帆走に変ず。夕頃無風となりカブラ海峡に於て漂流し好風を待つ。

5月14日　午前7時40分無風続く事2日にして、猶吹き来るべき兆候なきを以て、総帆を収め汽走す。其夜11時45分西微風を得て、再び帆走に変ず。これより6日順逆強弱の諸風に対して大に操船実習を行ひ、又時々＿、鱶の漁獲をなしつつ北進し、

5月19日　夕景台湾南端鵞鑾鼻角の灯台を経過したり。

5月20日　南西風浪烈しく天候不穏なるを以て、午前8時2分紅頭嶼東清湾に避難投錨す。本島は台湾南端の東方40浬の洋上に屹立し、40浬を隔てて火焼島と南北相対せり。北西より南東に延びて約7浬にして其幅1浬乃至4浬あり。海岸は多く立錐状の断崖をな

7-13(61)

し、北東及南西の両側面には稍低き傾斜地を有し、全島を通じて7条の渓流ありて水量頗る多し。東北側には東清湾あり、南西風浪の時は好錨泊たり。南西側に矢代湾あり、北東信風期の錨地たり。唯周囲所々に岩礁散布し、直立せるが故に1浬以内には深き注意を要す。

島内には７ケの蕃社あり。人口約1,300とす。男女共に裸体にして、女は僅かに其腰部に布片を纏ひ、男子は褌一貫に竹皮の笠を戴く。両姓共に檳榔樹(びんろうじゅ)の実を噛むで、唇歯共に赤褐色を帯び、恰も血を含めるに似たるを以て、一見歯無きが如く、又猛悪鬼の如き相ありと雖も、之に接する時は温順実に愛すべきものあり。駐在巡査の語る所によれば、喧嘩口論をなす事稀にして、窃盗の如きは皆無なりと云へり。女は農事を務め、水芋、甘薯等を作り、男は主として漁業に従事し、早朝より小舟に乗りて出漁し、午時に近づきて帰るを常とす。幸にして好漁を得たる時は、之を一種の祭壇に供て其家に蔵する最上の宝物(銀貨を打延ばして薄片となしたるものを綴り合せて笠形の帽となしたるを最も珍重せり。然し銀を有する事十分ならざるものは、他品を以て之に代ふと云ふ)を取出す。此時主婦は夜光貝の珠を綴りたる首飾を垂し、裸体正装をなし、土壷に清水を汲み来りて男に渡せば、男は小なる竹筒を以て之を魚の目と口に注ぎつつ、呪文を誦して祈祷をなす事少時にして、調理を始む。即ち初め祭壇は今は変じて俎台に用ひらるるも亦妙なり。台は其長さ3,4呎の盆形にして、大小2個の凹みを有し、大は稍浅くして魚体を戴するに宜しく、小は稍深くして臓腑を納るるに適す。初め之を見し時は豚に食事を与ふる器具と想像せられ、之を以て其豚を愛するの情深きに出づるものとなし、其余りに情潔なるを感嘆したるも遂に其用途を目撃して理解するを得たり。

彼等は布片又は古服を好み、又銀貨を愛す(但し銀貨は打延ばして帽を造らんが為なり)。夜光貝又は玩弄用小舟等を持ち来りて頻りに交換を求む。試みに古き肌着二三を恵みたるに、之を頭上に戴き、更に首に戴かせて叩頭(こうとう)(頭を地にすりつけておじぎをする意)三拝し、「ヨーイ、ヨーイ」(謝礼の辞)を三唱し、「チンマン、チンマン」(上等品と称揚する語)を連呼したり。

蓄音器を聞かせて之を試みたるに、驚喜極まりなく、皆其器に多数の小人潜み居るかを怪まざるはなかりき。駐在巡査は喜んで教化上の一大方便を得たるを謝したり。

彼等はヤアミ族に属し、原始時代の人類の僅かに進化したるものなり。例へば20銭銀貨より10銭2個を勝れりとなす事小児と等しく、食物を与ふれば先ず嗅むて、而して之を食ふ事犬に似たり。寝るに床なく、食ふに箸なく、政治、教育、文字等は夢むる事もなきは勿論にして、一切の利器一もある事なし。家を造るに一枚の板を得んとせば、一木を倒すに数日を要し、更に之を削りて板となすにまた数日を要す。土製の鍋も壷も亦自ら作り、漁舟も亦自ら造るに非ざれば之を得るの道なし。若し大工、鍛冶、木挽等、日常用の職人を派して彼等の指導をする事あらば、利する所大ならんか。

彼等は普通４個の建物を有す。一は寝室用にして最も大なるものにして、長さ4,5

間、幅3間位の土地を掘り下ぐる事4,5尺にして、石を畳て周囲を固め、其内に萱葺屋根の低き家を作り、高さ約2尺の板床を張りて、是に起臥せり。入口は2個あり、共に匍伏して出入りす。内部も立って歩行するに足らず、通気導光の方なきが故に、陰暗極まるものなり。第二は地上に建てたる稍小なるものにして、平素作業用のものにして、壮丁は多く之に起臥すと云ふ。第三は作業用よりも又小なるものにして、物置として使用せらる。第四は方4,5尺の構造にして、納涼休息用とす。往々其下部を物置に使用するものあり。皆木皮縛の粗造りに過ぎぬも、寝屋周囲及庭内の石畳は比較的良好のものなり。

語数は甚だ少しと云ふ。物件及事故共に少き彼等の当然たる所なり。茲に駐在巡査より習得したる数語を挙げん。

水芋・・ソーリー	山芋・・オビ	甘薯・・ワカイ	黒芋・・ケイタン
飛魚・・アリボンボン	鯨・・アルモンボー	生の夜光貝・・ヤラン	
夜光貝売・・カラプ	人・・タウ	男・・ガガカイ	女・・ババケス
小児・・カナカン	豚・・バブイ	山羊・・カギリン	鶏・・ココツク
卵・・エエツイ	一・・アサ	二・・ロワ	三・・アトロ
四・・アパ	五・・リマ	六・・アヌム	七・・ピト
八・・ワオ	九・・チャム	十・・ポー	天・・タウルト
悪魔・・アンニオト	汽船・・アバン	漁舟・・タタラ	捕魚・・ラッパン
出漁・・スモーム	来し・・マイ	去し・・アゲラナ	玩弄舟・・アババン
予に与へよ・・アローコ	汝に与ふ・・アッペンモー		交換・・イナイナ
上等・美・・チンマン	下等・醜・・アブチンマン		有難ふ・・ヨーイ
家・・ババイ	倉庫・・アリリン	作業場・・マカラン	涼台・・タガカル
太陽・・アラオ	月・・ブガン	火・・アポイ	

5月21日　夜風位変じたるを以て、直ちに抜錨基隆に向ひ、汽走し、翌午前1時50分帆走に変ず。後北東の逆風となり、減帆逆航したるも、順潮強くして日々良好なる航程を得、航走3日にして台湾北端鼻頭角を経過したり。

5月25日　午前6時40分汽走に変じ、午後0時37分基隆外港に着して検疫を終り、午後1時4分内港第3号浮標に繋留す。

5月27 28日　基隆公会堂に於て生徒卒業試験執行す。

5月29 30日　黒田、鎌田両教官指導の下に生徒一同台北見学に出張す。本日清水12屯半を搭載す。又電令により練習生新井藤一郎を栄丸に転乗の為下船せしむ。

5月31日　午前9時30分基隆を発し、鹿児島に向ふ。10時15分基隆島を過ぐる事約2海里にして海豚(いるか)の大群に遇ひ、1尾を獲たり。午後1時15分帆走に変ず。

6月3日　夜練習生黒野元憲突然喀血したるを以て、岩崎事務員応急手当をなし、一時出血停止したるも、経過良好ならざるを以て、

7-14(68)

6月4日　未明より機関を用意し、午前8時より汽走鹿児島に向ひ急航す。

6月5日　午前0時25分 30°N 126°Eに至り、停止して海洋調査を行ひ、且つ海流瓶140号至168号を放入して、再び進航す。

午前 3時40分 126°14'E　29°56'N に海流瓶第169号至194号を放入す。

午前 5時20分再び停止して海洋調査を行ひ、海流瓶194号至220号を放入す。

其位置 126°30'E　29°52'N。

8時20分第4回の放瓶を行ふ(221号至246号、其位置 126°42'E　29°50'N)。

午前10時50分三度停止して海洋調査及放瓶す

(247号至272号、其位置 127°00'E　29°44'N)。

午後 2時5分放瓶す (273号至298号、其位置 127°14'E　29°51'N)。

午後 7時放瓶を行ふ(299号至320号、其位置 127°30'E　30°00'N)。

其夜暴風の為め機関を停止し、縮帆を装して踟ちゅう法を行ふ。

6月6日　午前6時20分暴風経過したるを以て汽走進航し、左(下)の位置に於て3回放瓶す。

第一	午後4時35分	128° 3'15"E	30° 1'N	323号至346号
第二	6時15分	128°18'30"E	30° 9'50"N	347号至371号
第三	8時	128°33'E	30°18'45"N	372号至395号

其付近の状況等詳細は川上助手提出海洋調査復命書にあり。

6月7日　午後1時45分鹿児島港に投錨す。3時20分検疫官吏来船。夜8時45分黒野練習生海病院に入院の為上陸す。岩崎事務員及学生2名、水夫1名付添ふ。

6月8 9日　生徒室及衣具消毒を行ふ。

6月10日　生徒に任意見学の為め上陸を許す。本日清水22屯半を搭載す。此夜鹿児島県下串木野沖禁止区域内にトロール船の侵害者を捜索すべき電令に接し、県当局者と打合をなす。

6月11日　午後4時30分当県水産技師淵邊中吉氏及び保安課詰巡査吉峰綱夫便乗す。同時出帆捜索に赴く。捜索は別紙図面の如く、11,12,13の三夜に亘り黄昏より早朝まで行ひたるも、更に影跡を認めざりき。而して日中は侵来者なく、捜索の要なしとの事なりしを以て、一日は中甑島港に投錨し、一日は串木野島平錨地に投錨し、生徒をして陸上見学を行はしめたり。

6月14日　午後2時9分鹿児島港に入港す。

6月15 16日　両日天候不良の為め滞船す。其間に於て急ぎ帰航すべき電令を受く。

6月17日　天候快復したるを以て、午前7時57分抜錨館山に向ふ。午後6時30分都井岬沖を経過し、適風を得て帆走に転ず。

6月18日　午前0時5分無風となり再び汽走に転ず。これより汽走を連続する2昼夜にして

6月20日　午前1時20分館山港に寄港し、日出より総員を以て漁具漁艇等を倉庫に納む。

6月21日　午前6時10分館山を発し、午前11時40分品川に投錨す。

衛　生　状　態

本航衛生状態は大に良好にして、熱帯の炎天にも僅かに臨時水夫梅田馬吉が香港－マニラの航途に於て頗る重症なる胃腸病に罹り数日就床したる外、一般壮健なりしが、基隆－鹿児島間航途に及んで、練習生黒野元憲肺結核に罹り頗る重症に陥りたるは唯一の恨事たり。其他詳細は岩崎事務員提出の報告に在るが如し。

海洋及生物調査

川上助手は専ら之に従事したり。其詳細は同氏復命書にあり。

漁　業　調　査

黒田技師、鎌田技手指導の下に生徒一同又は交代して調査に従事したり。其詳細報告書左記(下記)の如し。

第一　台湾基隆漁業調査報告書

第二　澎湖島漁業調査報告書

第三　打狗漁業調査報告書

第四　香港に於ける漁業調査報告書

第五　澳門漁業調査報告書

第六　菲律賓群島漁業調査報告書

第七　台北視察報告書

右（上）報告＿也

明治45年6月22日　　雲鷹丸船長 技師　浅利孝爾

水産講習所長　下　啓助 殿

7-17(15)